

与謝野鉄幹に学ぶ明治日本の『覇気』

「覇気」に欠ける日本人

現代日本人に欠けてあるもの、それは何と云つても「覇気」だらう。大学や予備校で学生たちと接する機会も多いが、青年らしい「覇気」の持ち主は稀である。酒に酔つて氣勢を上げたりせぬどころか、あまり酒じたいを飲まない。殆ど自己主張をせず、他人を声高に批判することもない。とりわけ、その傾向は男子において強く、「草食系男子」などといふ言葉があるくらいである。ガサツでないのは結構だが、「覇気」に溢れた明治人と引き比べて、何となく物足りなさを感じるのは筆者だけではあるまい。

与謝野鉄幹の生ひ立ち

「覇気」に溢れた明治人の中でも、鉄幹与謝野寛の「覇気」は群を抜いてゐる。明治六（一八七三）年二月二十六日に京都で生まれた寛は、浄土真宗の僧侶であつた父・礼厳について鹿児島に移り住んだけれども、父が病ひを發したため、京都に戻らざるを得なくなつた。礼厳は学殖豊かな人物で、幼少の寛に漢学から洋学まで教へ込んださうだが、檀家を持たなかつたために家計は苦しく、三人の兄は出奔したり、他家の養子となつてゐる。寛もまた、大阪住吉にある安養寺の養子となつた。

だが、養家を去つて与謝野家に復籍し、明治二十二（一八八九）年五月頃からは、次兄の照幢が婿養子となつてゐた山口県徳山の徳応寺に身を寄せる。——照幢の義父・赤松連城は、始めてヨーロッパに渡つた日本人僧侶の一人で、龍谷大学の綜理を務めるなど浄土真宗西本願寺派において重きをなした。因みに、照幢の四男・克麿は、吉野作造の女婿となり、後には国家社会主義者を鼓吹したことで知られる。——寛は、徳応寺が開設した《白蓮女学校》（後に《徳山女学校》）で教鞭を執る傍ら、照幢が発行してゐた『山口県積善会雑誌』の編輯を手伝つた。また、この頃より「鉄幹」と号し、歌を詠み始める。

「亡国の音」

その後、明治二十五（一八九二）年春に徳山を去つて京都に戻り、同年十一月には上京して落合直文の門を叩く。楠公父子の別れを描いた「桜井の訣別」の作者としても知られる直文は、森鷗外や井上通泰（柳田国男の実兄）らと新声社を結成し、共訳詩集『於母影』を刊行するなど新体詩の旗手であつた。明治二十六（一八九三）年二月、直文が《あさ香社》を結成すると、鉄幹も主要な同人として作歌に励んだ。

明治二十七（一八九四）年五月、鉄幹は『二六新報』誌上に「亡国の音（現代の非丈夫的和歌を罵る）」といふ一文を發表した。「委靡纖弱の文は乱世を胚胎し豪宕悲壯の文は盛世を胚胎す」といふ古人の言を紹介した鉄幹は、「余は和歌に於ても常に亦此理を信ずる者也」と述べた上で、「余は今代の歌を論難せむとするに当り先づ一言以て彼れの多くを蔽ふべし、曰く『亡国の音』聖世あへて不祥の語をなして憚らざるが如しと雖も蓋し已むを得ざる也」と、旧派（桂園派）に宣戦布告をする。「大丈夫の一呼一吸は直ちに宇宙を吞吐くし來る、既にこの大度量ありて宇宙を歌ふ宇宙即ち我歌也」と豪語する鉄幹は、古人の歌を模倣するだけで自らの氣宇を養はうとしない旧派に対して、「眼低く手卑しきものの古人を模するまた可なりと雖も、犬は纔に犬を知りカヘルは纔にカヘルを知る、小丈夫つひに大丈夫の歌を識別する能はず、彼等はおのづから各々自己の量と合するものを求めて自ら古人の短所を学び來る」と論難して已まない。引き続いて、高崎正風・福羽美

静・本居豊穎などの歌を手厳しく批判した上で「國を危うする者は大丈夫の元氣衰へて女性之に克つに在り、今や上下挙つて此類の女性的和歌を崇拜す其害毒果たして如何」と嘆いてゐる。

ますらをの歌

あたかも同じ頃、朝鮮で東学党の乱が勃発した。乱そのものは六月初めに収まつたが、現地に派遣された日清両軍の睨み合ひは続き、七月末に戦鬪の火蓋が切られる。鉄幹は、「いたづらに何をかいはむ事はただこの太刀にありただこの太刀に」といつた歌を紙上に発表するだけでは慊らず、日清戦争終結直後の明治二十八（一八九五）年四月に朝鮮へ渡つた。直文の実弟である鮎貝房之進（槐園）から、日本語学校（乙未義塾）の教員として招かれたのだ。鉄幹は、教員としての意気込みを「から山に桜を植ゑてから人にやまと男子の歌うたはせむ」と詠んでゐる。

しかしながら、半年後の十月、閔妃（高宗の正妃で親露反日政策を推進した）の殺害事件に関与したという嫌疑を受けた鉄幹は日本に送還されてしまふ。無実が証明され、十二月に鉄幹は再び渡鮮するも、乙未義塾じたいが廃校となる。翌年二月に高宗がロシア大使館へ逃げ込むなど、朝鮮の宮廷における親露派勢力の拡大が背景にあるのだらう。

直文に呼び戻された鉄幹は、明治二十九（一八九六）年七月に初の詩歌集『東西南北』を上梓する。「韓山に秋かぜ立つや太刀なでてわれ思ふことなきにしもあらず」、「尾上にはいたくも虎の吼ゆるかな夕は風にならむとしらむ」となど雄渾な詠みぶりは「虎剣調」とも呼ばれ、鉄幹は詩人としての地位を確立した。引き続き、明治三十二（一八九九）年十一月に《新詩社》を結成し、翌年四月には機関紙『明星』を創刊する。同誌には鳳晶子・山川登美子——鉄幹は妻子があるにもかかわらず、両者と不倫関係にあつたが、最終的には妻と別れて晶子と結婚——など女流歌人の濃艶な歌が並び、浪漫主義文学運動の拠点となつた。明治三十四（一九〇一）年二月には、「妻をめとらば才たけて」で始まる「人を恋ふる歌」などを収録した『鉄幹子』を刊行するけれども、この頃が鉄幹の文学活動のピークで、同年八月に『みだれ髪』を発表して大反響を呼んだ晶子が文壇に地位を獲得して行くのに対して、鉄幹の存在は忘れ去られていく。昭和十（一九三五）年三月十五日、鉄幹は六二歳で静かに生涯を閉ぢる。

成熟社会の宿命を乗り越へよ！

大国ロシアに勝利し、西洋列強の圧力を跳ね返したことにより、かへつて大日本帝国は目標を失つた。別の云ひ方をすれば、社会として「成熟」してしまつたのである。そのやうな時代には「覇氣」など必要ないどころか、安定を脅かす邪魔な存在でしかない。鉄幹が存在感を失つたのは当然のことだ。

その後、大東亜戦争により大日本帝国は瓦解する。戦後の日本は国家目標を持つどころか、「独立国」でさへなかつたが、戦後復興・高度成長を経て社会としては「成熟」してしまふ。こんな時代に「覇氣」を示すなど論外であり、三島由紀夫のやうな「ますらを」は死を選ばねばならなかつた。

今日、さらに状況は悪くなつてゐる。「成熟」を過ぎて「爛熟」の状態にあると云つてよいだらう。このままでは、「腐爛」に至るのも時間の問題だ。かうなつた以上、たとへ無謀と嘲られようとも、政財官学報に巢食ふ戦後エリート総体と闘ふ「覇氣」を持たねばならぬ。「保守」を論ずる時期は過ぎた。「維新」を行はずより他に、我々が甦生する途

はないのである。